

## 英国系人類学からみた日本

— リーチの「動物カテゴリー」を例として —

トム・ギル\*

## Japan as seen from social anthropology of the British school

— Leach's 'Animal Categories' as an example —

Tom Gill

## 第 1 部

本稿のタイトルは「英国系人類学から見た日本」であるが、まず言えるのは、英国系の人類学はあまり日本を見ていないということである。主な社会人類学と文化人類学のジャーナルではめったに日本のテーマを話題にする論文は見あたらないし、日本関連の本もあまり論評されていない。たとえば、イギリスのRoyal Anthropological Instituteが出版している有名な季刊誌、Journal of the Royal Anthropological Institute (JRAI), (本来Manというタイトルであったが)を見てみよう。これはイギリスの社会人類学で一番地位の高いジャーナルであるが、日本をテーマにする論文は実に少ない。1966年から現在まで、JRAIは1,000本程度の論文を載せているが、日本を取り扱っている論文は8本のみである。1996年と1997年前半で出版された6つの号をより詳しく見ると、46本の論文の中、日本のものは皆無である。より短い、ブック・レビューを見ても、総計305本の中、わずか4本のみが日本に関する本のレビューである。そして、さらに短いものである「届いた本」という欄——つまり、この本が1冊編集部に届いたという事実を知らせるだけというもので

あるが——を見ても、790冊の中、10冊だけが日本に関する本であった。

ここでは主に私が一番よく知っているイギリスの人類学の事を記しているが、アメリカの優秀な人類学のジャーナル、American Anthropologistも調査した。去年から今年にかけて最近の6つの号を見ると、61本の論文の中に日本のものはゼロである。普通のレビューより長い「レビュー・エッセー」を見ても、85本の中、日本をテーマにするものはたった1本だけである。そして普通のレビュー298本のうち、日本に関する本のレビューは3本であった。

この他のジャーナル、国、学会についての詳細は知らないが、先日私はオーストラリア人類学協会の年次大会で発表を行った。特別なテーマが設けられていない大会で、全部で102本の発表があった。しかし、日本に関する発表をしたのは、私だけであり、一抹の寂しさを禁じ得なかった。

要するに、例外はあるが、日本に関して、英語圏の人類学者はあまり興味がないと言っても過言ではない。

これはなぜであろうか。おそらく次にあげる2つの原因があると思われる。

まず人類学とは何か、日本とは何か、という極

---

\*社会人類学 (研究対象：日本)

めて根本的な定義の問題があろう。周知の通り、イギリスの社会人類学は昔から大英帝国と深い関係があり、現在でも世界全域を、人類学を対象とする「西欧」と、人類学の対象となる「東洋」あるいは「第三世界」に分ける傾向がある。おそらくEdward Saidの名著『オリエンタリズム』に記された枠組みはまだまだ有効であろう、そこに書いてある通りだと思う。ところが、日本は東洋の国でありながら産業化を進めて所得水準が上昇し、かつ欧米と戦争を起こし、オリエンタリスト的なステレオタイプに当てはまっていない。19世紀の有名なイギリスの帝国主義者、Rudyard Kiplingがいう：“The Jap isn’t native, and he isn’t a sahib either.”（「ジャップというものは原始人でもなく、紳士でもない」）なのである。ある意味で、イギリスの文化は、その差別的な混乱した態度から未だ抜け出していないのである。

次に物理的な要因もあろう。特にこの20年間で、日本でフィールドワークを行う事は経済的に非常に困難になっている。私は横浜でフィールドワークを行ったが、英国政府系特殊法人である事業団から補助金を得た。それでも生活には足りずアルバイトをせざるをえなかったが、同じ金額で、5、6人の研究員をアフリカや東南アジアに送ることができたであろう。これでは日本に行く人類学研究者が少ないのは当たり前である。最近ようやく円安が進んだため、こうした状況が幾分緩和されたと思われるが。

しかし、「純粹」な人類学的研究は少ないにせよ、他の学問分野においては日本という国はかなり研究されている。イギリスの場合だと、主に人類学や社会学などの分野ではなく“Japanese Studies”「日本学」というかなり特殊な学問分野として研究されている。これにも経済的な要因がある。金満日本の大企業が出資し、イギリ

スの大学に「日本学」の学科、あるいは研究所を設立している。オックスフォード大学の場合、日産自動車がスポンサーになった日産インスティテュートは典型的な例である。私の母校のロンドン大学政治経済学校（LSE）なら、STICERD（サントリートヨタ研究所）。同じロンドン大学の東洋アフリカ学校（SOAS）なら、JRC（日本学研究所）など。

但しケンブリッジ大学は出足が遅く、日本の大企業と組むことができなかった。ケンブリッジ大学の場合、ジャパン・マナーは一つの講義室で終わってしまった。あるケンブリッジの日本学者が言うには「オックスフォードにはあの立派な日産研究所があるのに、我々はまだ東洋学部（つまり、オリエンタル・スタディーズ）のままだ。あの貧乏っぽいサンスクリットなどの連中と建物を共用しなければならない。そして今やバブル崩壊で日本の企業は余裕がない」。

このように日本が豊かになったため、普通の人類学者が殆ど日本に行かれなくなってしまっただけではなく、一方で、新しい、人類学でも社会学でも何でもなく、とにかく日本を専門にするいわゆる「族議員」のような「族学者」が生まれてきているのである。

こうした分野の論文は一般の人類学のジャーナルではなく、ジャパン・フォーラムのような、日本学専門誌に出る。場合によって、ジャーナルも、ジャパン・マナーに依存している。

私はJapan Anthropology Workshop（日本人類学ワークショップ；JAWSと呼ぶ）という組織のメンバーである。これは日本を研究対象とする人類学者の集まりである。もともとイギリス発信のグループであるが、かなり国際的になっている。本稿のために、JAWSのメンバーの所属学科を調査してみた。学生もメンバーに

なっており、日本人メンバーも少なくないが、ここでは日本以外の国の大学で活躍している非

日本人学者のみを対象にした。その結果は以下である。

地 域					
ボード	イギリス	ヨーロッパ	北米	オセアニア	合計*
人類学	5	4	13	0	27
社会学	2	1	1	0	4
地域学	3	5	2	5	18
日本学	9	20	2	7	38
合計	19	30	18	12	87

\*合計は記載されている地域以外も含む。

この人たちは単に日本に興味を持っている人ではなく、プロの人類学者の組織である。にもかかわらず、メンバーの3分の1しか人類学の環境で研究をしていない。残りの3分の2はエリア・スタディーズ、主にジャパン・スタディーズの学科で働いている。アメリカとカナダにおいてのみ、日本が他の国と一緒に研究されている。イギリス、他のヨーロッパ諸国、およびオーストラリア、ニュージーランドでは、ジャパン・スタディーズとアジア・スタディーズは圧倒的に強い。

この傾向には問題があると思う。日本がこのように特別扱いされると研究の内容も曲がってしまうことは避けられないからである。最近出版された日本に関する人類学の本を見れば明らかである。90年代に出版された5冊を簡単に紹介する。

**Crafting Selves, by Dorinne Kondo, 1990.**

#### 自己の製造

東京の下町にある小さな製菓工場をフィールドに、社員がどのように自分を他人の前に示すかを分析する。同じ人物が、立場によって全然

異なる「自己」を出す。即ち、「自己」というのは、生まれつきの唯一なものではなく、人が半分意識的に作るものである。インフォーマントは主に菓子職人で、職人は英語で「craftsman」と呼ぶことから、「crafting」（巧みに作る）という隠喩を用いている。彼らは、菓子だけではなく、自分の存在も巧みに作っているという感じである。しかもその「自己」は単数ではなく、複数である。男女関係、社会的な力関係などによって、表出する自己が違ってくる。おそらくこの一冊は90年代で一番影響力のある「ジャパン・人類学・ブック」だと思われる。

**Japanese Sense of Self, edited by Nancy R. Rosenberger, 1992.**

#### 日本人の自己の感覚

この本は七つの小論文を集めている。先に触れたドリー・コンドウは「Multiple Selves」（複数自己）というタイトルで論文を入れているが、「Crafting Selves」と殆ど変わらない内容である。ローゼンバーガーは、「Tree in summer, tree in winter: movement of self in Japan」（夏の木、冬の木：日本に於ける自己の動き）という小論文を出している。この論

文によると「the Japanese self」（日本人の自己）は三次元チェッカー・ゲーム（a three-dimensional checker game）で、その三つの層は縦と横の形で相互に連携する。その三つの層とは、一つめは「気」であり、二つめは「甘え」、三つめは「公式・非公式」である。一人の日本人の中年の婦人を例として、このかなり複雑な装置の動き方を描写する。この本に含まれている別的小論文には滝栄・杉山・リーブラの「日本の文化に於ける自己」があるが、ここでも日本人には三つの自己があると主張している。ただ、この場合、気・甘え・公式ではなく、「相互行為的な自己・内面の自己・無限の自己」（the interactional self, the inner self and the boundless self）となっている。

**Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society and Language, edited by Jane Bachnik and Charles J. Quinn, 1994.**

**文脈による意味：日本人の自己，社会と言語に於ける内と外**

これも小論文集で、理論的には前に触れた本とはほぼ変わらない。バッチニクは、内・外は日本文化の支配的な思想のパターンであり、どのような社会現象でもこの概念で説明できると考えている。西欧の文化は個人主義のエゴで築いたものであるけれども、日本は違う。日本人はエゴがない。その代わり、「内」がある。場合によってその「内」は家族であり、家であり、会社であり、頻繁に変わっている。だから「essential」（本質的）なものではなく、「situational」（状況依存的）なものである。

**Wrapping Culture, by Joy Hendry, 1995.**  
**包みの文化・文化を包んで**

この本は最近流行になっている「wrapping」（包み）概念を、日本文化の支配的な隠喩として取り上げている。お金を熨斗袋に入れたり、プレゼントをデパートの店員に包ませたりしながら、体も着物や帯に包むし、言葉も「敬語」という包みに入れてから相手に渡す。そしてサムライの城は壕などの建物によって包まれるし、奥に行き着くまでには、藪や簾も越えなければならない。普通の民家でも、房間や障子によって、スペースが包まれている、など。Clifford Geertzの言葉を借りて、包み概念は日本の「社会現実のモデル」とする。

**Packaged Japaneseness: Weddings, Business and Brides, by Ofra Goldstein-Gidoni, 1997**

**包まれた日本人らしさ：結婚式，商売，新婦**

神戸市にあるブライダル・プラザをフィールドにして、結婚式の「作り方」を分析する。日本人の結婚式では、新婦の役割は日本文化に於ける「美しさ」のシンボルとしたプロダクトである。様々な着物やドレスに包まれて、様々なアングルから写真を撮られて、理想化された日本人らしさのイメージが作り上げられる。

もちろん以上の5冊が決して日本に関する人類学の全体を代表するなどとは言わない。これとまた別に、地理的なものに限ったエスノグラフィもたくさんある。最近の物として、Theodore Bestor のNeighborhood Tokyo（近所の東京）とかEdward Fowler のSan'ya Blues（山谷ブルース）など、充実した本が相当ある。しかし、外国人人類学者が「日本人」に関して一般的な話をしようとするとき、今紹介した5冊の本のような話がよく出るようだ。

こうした本は質的には様々だが、基本的にこ

のような人類学は実り多いとは思わない。なぜなら、こうした本は90年代の「日本人論」だからである。周知のように日本人論——日本論とも呼ばれるが——は疾うに信頼性を失った理論である。ようするに、日本人は他の国の人々と根本的に違う「ユニーク」な存在であるという主張である。日本人の日本人論者は沢山あり、場合によってその「ユニーク」なものを「ユニークリー素晴らしい」と解釈して、国家主義的なものになっている。外国人の日本人論者には様々な政治的色彩があり、日本人を神様のように、あるいはモンスターのように描写している。これら日本人論のキー・ワードには、「内・外」、「表・裏」、「本音・建前」といったものが多い。日本人論にはよくこうした二分法の形が現れる。よく言えば、日本人は単純な西欧人より文明的な存在に見える、悪く言えば、平気な顔をして嘘をつくといったものである。日本国内の日本人論はかなり古く、遅くとも今世紀初頭あたりから存在したとPeter N. Daleはその著『日本の独自性の神話』で指摘している。外国の人類学系日本人論はおそらくルース・ベネディクトのChrysanthemum and the Sword (1946) (『菊と刀』1967年)から始まったと言える。ベネディクトはこう言っている。「刀も菊も共に一つの絵の部分である。日本人は最高度に喧嘩好きであると共におとなしく、軍国主義的であると共に耽美的、不遜であると共に礼儀正しく、頑固であると共に順応性に富み、従順であると共にうるさくこづき回されることを憤り、忠実であると共に不忠実であり、勇敢であると共に臆病であり、保守的であると共に新しいものを喜んで迎え入れる」(長谷川松治訳 p.6)。私に言わせれば、信じられないナンセンスである。しかし、周知の通り、この本は元々米国の軍事用報告であった。その影響

もあって、アメリカのトルーマン大統領が原子爆弾を日本に落とすことを決めたという説さえある。

50年が経った現在、『菊と刀』を読むと一種の人種差別にすぎない印象があるが、この本と他の日本人論の間にはまだまだ影響関係が意外に強くあると思われる。特に二分法の考え方が、何回も変身しながら、いまなおジャパニーズ・スタディーズの中に影響が残っている。

ハルミ・ベフは長年日本人論の批判を続けており、その危険性を一番はっきりした形で示している。1993年の「Nationalism and Nihonjinron」はその好例であり、彼が編集した小論文集、「Cultural Nationalism in East Asia」に収録されている。他にも先に触れたPeter N. Daleは1986年に出版した「The Myth of Japanese Uniqueness」(『日本人の独自性の神話』)で徹底的に日本人論を分析して、批判している。こうした文献のおかげで、「日本人論」は間違いだと殆どの社会学者が呼ぶようになってきた。ところが、先に触れた5冊の本を見ると日本人論の色彩がやはり強い。バッチニックとクインの場合、いまだ「内」と「外」をそのまま日本人の性格の鍵として考えている。American Anthropologistでこの本を論評したアン・アリソンはこう述べている。「(この本)の弱点は、日本人らしさを定義する永久的な、まして本質的な文化原理の確認に固執している事である(中略)今現在日本に関する学問がまだまだこの方向で続けられている事には失望する」(Its weakness is the adherence to a belief in an eternal, even essential, cultural principle that locates Japaneseness... it is disappointing that any scholarship on Japan today continues in this direction.)

彼女の指摘は正しい。日本人論はもうダメだ

というのが常識になった現在では、日本を取り上げる人類学の論文の多くは「ユニークな、日本ならではの本質的なものを探していない」と前置きで書いているが、本文に入ると、実は異なる。場合によって、言葉の使い方は従来の日本人論とは多少異なっている。たとえば「本音と建前」は「内面の自己と相互連絡の自己」、あるいは「非公式的な自己と公式的な自己」、また、ポスト・モダン調の言葉を使って、「内と外」は「中身と包み」になっている。だが私の印象としては、こうした変化はごく表面的なもので、ただの包みとでも言おうか、中身はこの50年間の長い間、大して変わっていないのである。

確かに、場合によって二分法が三分法に変わっている。バチ尼克とリーブラは「日本人の自己」を三つのレベルに分けている。まるで東京モーターショーで見る車の新しいモデルのようである。「新セラミック・エンジン」とか「自動サン・ルーフ」の代わりに「三次元で動く自己」とか「新相互行為の自己」が付いているのである。

もっとも根本的な問題は、思考のスタート・ラインである。こうした本の著者は、まず日本人という非常に面白い人々がいると考え、その面白い人の有様をどう解釈すればいいか、からスタートする。これが間違ではないだろうか。日本人はもちろん面白いが、世界の人々は皆面白い。日本人はもちろんユニークだが、世界の人々は皆ユニークである。日本人はユニークリー・ユニークでもなく、特にそのユニークさを説明する必要はない。したがって、日本に関してよい人類学の本を書くならば、こうした前提を捨てなければならない。日本を「普通な国」と定義するべきだ。有名なアイルランドの冗談がある。ある男が道に迷い、他人に案内を頼む。す

ると、相手はよく考えて、「あそこに行きたいのなら、ここから出発しない方がいい」と答えた。同様に、人類学において、「日本人をどのように説明すればいいか」といった問題提起から始める事は適切ではない。

だからこそ、先に紹介した制度上の要因は重要である。ジャパニーズ・スタディーズのような学科に在職する人は日本を「普通の国」として考えられるだろうか？ そしてたとえ人類学の環境で日本を研究しても、それを可能にする補助金は、場合によって日本の事業団——政府系の国際交流基金であり、大企業系の大和・トヨタ・サントリーなどの基金であり、“偉大な博愛家” 笹川良一の日本船舶振興会が設立した笹川財団——から出たケースが多い。こうした具体的な背景があるとどうしても日本を特別視してしまいがちである。

こうした本を書く人は自分が日本人論者と考えられると困るため、そう見えないように様々な工夫をする。例えば、日本を他の国と比べるといったことである。だがこうした国際比較には中途半端な物が多い。先に触れた「包みの文化」のサブタイトルは「Politeness, Presentation and Power in Japan and Other Societies」（日本とその他の社会に於ける礼儀、提示と力；下線は筆者）が付いている。本を開くと、日本以外の地域の人類学が少しだけ引用されている。写真も、いかにも日本のステレオタイプの物（着物、浮世絵、御神輿など）の真ん中にアマゾンのインディオ族の写真が一枚だけある。実際笑うべきか泣くべきか分らない。

## 第 2 部

批判は簡単だが、「日本人論」に代わるどのようなアプローチが適切だろうか。

私はLSEの社会人類学部で博士号を取ったが、教授陣に、一人も日本の専門家がなかった。イギリスの社会人類学の伝統では、地域よりもまずテーマを考える。死の儀式、物の交換、男女関係等、テーマを先に決める。そしてそのテーマに適切な地域で研究する。ジャパニーズ・スタディーズは逆である。日本を研究するという前提で、研究のテーマを後で考えるケースが多い。

そこで、私は小さな実験を行いたいと思う。イギリスの社会人類学の古典的なテーマを「日本の場合」に適用するとどうなるかという実験である。選んだのは、エドモンド・リーチの有名な小論文、「Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse」（言語の人類学的側面：動物のカテゴリーと言語的な侮辱、1964年）である。

エドモンド・リーチ（1910～1989年）には『高地ビルマの政治体系』（1954年）、『人類学再考』（1961年）、スリランカの村を対象にする『プル・エリヤ』（同年）、『文化とコミュニケーション』（1976年）など名著が残っている。戦後のイギリスの人類学者としておそらくもっとも構造主義的な色が濃いリーチは、一時「唯一レヴィ・ストロースが分かる英国人」という評判を得、レヴィ・ストロースを英語圏の人類学に紹介した人物でもある。

彼の「動物カテゴリー」はさすがにレヴィ・ストロース系構造主義とイギリスのプラグマティズムが混在し、そしてやや突飛な味もある。テーマはタブーである。特にイギリスのタブー言葉と動物に関する人間の態度を扱っている。事例は殆どリーチの日常生活の場であるイギリスの文化から取っているが、『高地ビルマの政治体系』で研究したカチン族も後書きで取り上げられている。しかしリーチは「ここで提示する原

則は必ずしも普遍的ではないが、非常に一般的である」（The principles which I adduce are very general, though not necessarily universal）と述べている。従ってリーチの原則を日本に適用できるかどうかを試す価値があるかもしれない。

さて、かなり複雑な議論を以下に単純に要約してみる。

1 リーチによればイギリスのタブー言葉はだいたい3種類ある。まずセックスや下ネタのような、体の関連語。神を冒瀆する言葉。そして動物系侮辱である。私の知る限り、日本の場合だと神を冒瀆するタブー言葉はない。イギリス人が嫌な目にあって「Oh my god!」とか「Jesus Christ!」と言う事があるが、日本人は神や仏を口にする事がなく、「くそ!」あるいは「畜生!」と言う。「くそ」は下ネタであり、「畜生」は元々「ただの動物」の意味で、リーチの他の二つのカテゴリーに入る。神の名を侮辱語として使うのは、ある意味では神に対する人間の小さな反乱だと思うが、やはり、ユダヤ・キリスト教の伝統にある強い父や独裁者のような神が仏教や神道にはないため、神に反乱を起こす理由がない。

2 リーチは動物関連侮辱語に焦点をあて、その言葉扱いと、その動物が食べられるかどうかという食物禁忌との関係を調べている。そして動物をやはり3種類に分ける。まず食物として認められた、日常的に食べられる動物、次に食物として認められながら、食べることはさけられる、また特別に儀礼的な状況でしか食べられない（意識的なタブーとされる）動物、最終にそもそも食物として認められていない（無意識的なタブーとされる）動物。

例えばイギリスだと牛を頻繁に食べる、狐は食物として認められていないという無意識的なタブーである。しかし馬や蛙は、人によっては食べられる事があると認識しながらも、その動物を食べる人は野蛮人だとされる。フランス人は馬も蛙も食べるから、文明人ではないという食生活に関連する人種差別は、イギリスには根強い。リーチの論文では触れられていないが、鯨とイルカを食物にする日本人に対しても、イギリス人は差別感を持つ。そしてタブーは動物の種類だけではなく、料理の方法も対象にする。イギリスの大衆新聞は日本の捕鯨を批判する時、必ず「日本人野郎はナマで食ってるぞ!」と繰り返して強調する。レヴィ・ストロースの有名な三段論法、raw:cooked::primitive:cultured（ナマ対調理＝原始的対文化的）は確かにイギリス人の深層に潜んでいる。もっとも、最近ロンドンでは寿司と刺身に人気が出ているが。

日本人はもしかすると、犬を食べる中国人・朝鮮人に対して、イギリス人が持つフランス人に対する食生活差別と似たものを持っているのではないか。いずれにせよリーチの三つのカテゴリーはすべて日本に有効だと言えるだろう。リーチが「無意識的なタブー」と呼ぶケースが多い――殆どの虫、猫、やはり狐、蛙等。意識的なタブーはより少ないが、近代以降も「四つ足を食べない」という日本人は相当いた。例えば私の自宅近くのたこ焼き屋の奥さんは「私のおばあちゃんはやはり四つ足の動物を絶対に食べなかった」と言っていた。この意識的なタブーは勿論仏教の伝統に基づいたものであるが、最近坊主も牛井を食べる時代になり、四つ足動物の食物禁忌を維持する人が極めて少なくなったことは確かであろう。

しかし、四つ足の肉を食べる抵抗感が無くなったとしても、その肉を日本の社会に提供する人々に対してはいまだなお差別が残っている。私は寿町という横浜にあるドヤ街でフィールドワークをしたが、毎年、冬には、ホームレスの男たちが凍死しないように、日雇い労働者の組合が「越冬」という2週間程度のキャンペーンを行っている。このキャンペーンを毎年、屠殺場作業員の労働組合のメンバーが一人二人ぐらい手伝ってくれる。それは、日雇い労働者と同じ職業差別を受けているため団結の意識があるからだとかれらは言う。精肉業で働く人が他の産業で就職したり、精肉業と関係のない人と結婚したりするのはなかなか難しいそうである。主な理由は、屠殺場で働く人の多くが被差別部落民であるという考えが日本人の間にあることらしい。実際には関東地方の場合屠殺場に勤める人の半分以上は被差別部落民ではない。元々動物を殺す仕事が穢れていると思われるため差別を受けていた人々の仕事になった訳であるし、今でも被差別部落民だとみなされるだけではなく、生き物を殺しているから、屠殺場の作業員が差別にあうとも言われる。

ところで、この点はイギリスの場合と対照的である。イギリス人は動物を殺すことを年々問題視し、狂牛病など衛生上の問題もあって、菜食主義者の人数は年々増えている。しかし一番過激な動物権利主義の運動家を除くと、屠殺場の人を忌む人はいないと思う。日本は仏教の菜食の伝統があるにも関わらず、菜食主義者が殆どいない。だが肉屋などを忌む人もいる。

朝鮮人は日本人の事を「chok-bali」と呼ぶそうである。これは「豚の足」という意味で、爪先が割れた足袋を穿く日本人を畜生の



ようなものだとしているのである。イギリス人はフランス人を蛙と呼ぶし、フランス人はイギリス人を「ロース・ビーフ」と呼ぶし、実に動物・食文化をテーマにする人種差別的な侮辱が多い。

しかし日本の意識的なタブーは特定な動物だけでなく、動物の肉の種類にも及んでいる。特に内臓には昔から抵抗感はあったと思う。イギリスでは動物の肝臓や腎臓は人気のある食べ物だが、日本だと腎臓はまず食べないし、肝臓は現代日本では食べられるようになってきたが、レバーという英語風の名前に変装されて、主に焼き肉など朝鮮・中華の料理の一品として考えられているようだ。被差別部落民に対する偏見の一つは、「動物の内臓を食う」という概念があったそうである。これは、たとえ事実だとしても、部落民の多くは貧困でそうせざるを得なかったためだったに違いない。いずれにせよ、内臓に対してタブーがある時期においてあった事は間違いない。

人はこういう食物禁忌現象を説明しようとするとき、よく衛生的な説明をもち出す。旧約聖書に見られる食物禁忌は、数百年來聖書学者が衛生のために定まったものとして解釈しようとしているが、メアリー・ダグラスが名作『Purity and Danger』（『汚穢と禁忌』1966年）で解明しているように、健康のためだという説明に当てはめる事のできない食物禁忌もある。ダグラスの作業はリーチの動物カテゴリー論に大きな影響を与えている。日本の動物の内臓に対する抵抗感も、衛生に関するものだとして私の日本人インフォーマントは言う。つまり、内臓は他の肉よりも早く腐るということである。しかし地方によっては、また動物の種類によっては、日本人は平気で内臓を食べる事が古来あった。例えば、ミル

トン他著『くじらの文化人類学』という本を見ると次のような記述がある。

「和田（千葉県の房総半島にある和田浦という捕鯨の町）では、鯨の内臓は食べない。タレをつくるには、肉を柔らかくする必要があるので、鯨を一晩海中においておきますから肉を切る前に内臓の腐敗が始まる。だから内臓を食べようとししないのは当然であろう。しかし九州や鮎川からきた鯨捕りは、南氷洋捕鯨を経験して、内臓に慣れているので小腸や心臓や子宮などを食べている。」（p. 124）  
（和歌山県の太地では）「血は捨てますが、それ以外はあらゆる部分を利用している。内臓、生殖器も食べ、骨は肥料にする。」（p. 125）

つまり、内臓を食べないことは衛生上当然だと思う和田の鯨捕りでも、九州や鮎川の人なら病気にならずに内臓を食べると認めるし、太地の鯨捕りは内臓をまったく平気で食べている。食文化に関しては、こうした文化的な矛盾はよく出る。

3 それでは、なぜある動物は食べてもよいがある動物は食べていけないのか。リーチは二つの説明を提供するが、一貫性はとくになく、互いに矛盾する事もある。一つはメアリー・ダグラスの変則動物論とまったく同じである。つまり、人間は動物を陸地、海と空のもの、温血と冷血のものなど、様々に分類し、その分類を脅かすものが変則的で忌みの対象になる。もう一つは人間からの距離を基にする説明である。この「距離」はかなり曖昧である。ときにリーチは「距離」を物理的なつもりで使う事がある。つまりペットは家の中に住むから人間に一番近い、農場の動物はもう少し距離がある。さらに遠くに森と野原の野獣が

いる。一番遠くに産業都市の人が動物園で見られないエキゾチックな動物がいる。だが、リーチはこの「距離」という言葉を主に概念的なものとして用いている。例えば人間と同じ温血動物や人間と同じように繁殖する動物は概念的に「近い」が、それに対し冷血動物や卵を生んで繁殖する動物は概念的に「遠い」という具合である。

リーチはこの「変則論」と「距離論」を明確に整理していないため批判は免れない。しかし、面白いことに、鯨とイルカは「変則論」によっても、「距離論」によっても、タブーが付くはずである。というのは、鯨・イルカは海に生きているが温血なので、分類を脅かす反則動物である。同時に、温血で人間と似た繁殖システムをもつイルカの場合はかなり脳が大きいので、概念距離的に人間に近い。リーチの理論は決して全般的に適用できると思わないが、この点はイギリス人がなぜ日本の捕鯨をこれほど激しく批判するかのヒントになろう。

さて、「距離論」に集中するが、リーチがいうには、一番近い動物、そして一番遠い動物は食べてはいけない。つまり、愛犬や猫はダメだし、象やサイやシマウマもダメである。農場の動物と森・野原の動物は食べてもいいが、前者はかなり人間から距離が近いので、食べ物にするには色々と工夫しなければいけない。その「工夫」は二つある。一つは去勢する事である。そうすると完全な動物を食べているわけではないとする事ができる。もう一つは、殺した動物の名前を変える事である。イギリス人はpigではなく、porkを食べる。Cowではなくbeef、sheepではなくmuttonをというように、生きている動物とその肉を名前によって区別する。しかし魚、ウサギ、鳥

のようなより遠い動物は、そうした区別なしで食べてもよい。

だが、ここにも問題点が山積している。特にリーチは全くイギリスの歴史を考慮していない。Pig, cow, sheepはすべてアングロサクソンの言葉で、pork, beef, muttonはすべてノルマン系、つまりフランス系の言葉である。1066年、イギリスがノルマン人に侵略されて以来、イギリスで美味しい肉を食べたのは主にフランス人であった。だが動物の世話をしたのはイギリス人であった。だからこそこの動物と肉の言語的な区別があるわけである。

それにしても偶然なのかもしれないが、この問題点だらけのリーチの理論は日本の食文化にある程度該当していると思う。まず豚か鶏を食べるとき、「肉」という言葉をつける。牛の場合だとさらに工夫して、訓読みを音読みに変えて、「牛肉」にする。また、仏教の食物禁忌が厳しかった江戸時代には、猪を「山鯨」、熊を「山のおじさん」と呼ぶこともあったそうである。

言葉だけではない。肉を人前に出す時も、「距離原則」が見える。私が住んでいたオックスフォードの食品市場に行くと、目の前に毛が付いたままのウサギや、羽が付いたままのキジや豚の丸ごと死体など、色々見られる。オックスフォードに住んでいる日本人主婦はこの事を知っているので、なるべく子供たちをその市場に連れて行かない。確かに気持ちが悪い。日本の肉屋では殺された動物の体をそのまま人に見せる事は絶対にない。日本における肉は四角い、赤い、プラスチックのような物である。ところが、日本の刺身レストランに行くと、目の前で生きている魚を生きづくりにして、動いているままで食べさせ

ている。小さな魚を生きているままで飲み込む事さえある。殆どのイギリス人はこうした料理を気持ちが悪く考える。私も、別に批判はしないが、あまり自分でやりたいと思わない。とにかく、人間に近い哺乳動物の死体をなるべく隠しながら、人間から遠い冷血の魚をこんなに自由に使う日本人はもしかすると、イギリス人よりリーチの「距離論」に一致するかもしれない。

- 4 リーチの動物カテゴリー論のもっとも構造的な部分は、食生活と結婚生活に相同関係があると指摘する部分である。動物に関して「近いもの」と「遠いもの」を食べてはいけないのと同様に、人間は「近いもの」、「遠いもの」と性交したり、結婚したりしてはいけない。男は自分の母や姉妹と絶対に結婚してはいけない。外国人、特に違う肌の色の人と結婚する事も、場合によって両親に禁止されたり、周囲の人に批判されたりする。近い従姉妹と性交してもいいが、結婚してはダメである。これは名前を変えたり、去勢したりして食べる農場の動物に該当する。民族、肌の色、社会階級が同じで、同じ町に住みながら血縁関係だけがない—こういう人が結婚相手としてちょうどよく、野原と森に生きて、狩りのシーズンといったルールさえ守れば、そのまま食べてもよい動物に当たる。

イギリスより日本の方が近いイトコとの結婚は認められているようだが、基本的には両国とも結婚の場合はリーチの構造が成立しやすい。つまり、近い人、遠い人とは結婚せず、中間の距離の人を適切な結婚相手であるとみなすのである。実際に、このいわゆる「Uカーブ」、つまり遠いものと近いものが似ており、真ん中のものが別扱いになるというパ

ターンは人間の生活の背後によくある。例えば、秘密をまったく知らない人に言う事はあまりなく、自分の両親や兄弟にも言えないが友達には言えるケースが日本でもよくあると思う。その「距離」概念で人間の生き方を解釈する力がすこしでもあれば、リーチは完全に失敗していないと私は思う。

この動物カテゴリーの話がどれほど日本人論批判に有効なのか定かではない。読み返したところ、日本人論的な部分は意外に多いと思わざるをえない。やはり、日本人論から脱する事は決して簡単なことではない。しかし、この話は小さな例にすぎない。いずれにせよ、私の言いたいことは以下である。人類学の対象は日本人ではない。生まれ、育ち、愛、結婚、老後、死。人の宗教、仕事、富と貧困。両親、兄弟、親戚。友達、敵。戦争、平和。これらの偉大なテーマから始めよう。そして、その探検の過程において偶然に、日本人やイギリス人のような不思議な存在を少しは理解できるようになるかもしれない。

#### 文献

- Bachnik, Jane and Quinn, Charles J. eds.  
1994 *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society and Language*. Princeton University Press.  
Benedict, Ruth  
1946 *The Chrysanthemum and the Sword*. Houghton Mifflin  
1967 『菊と刀』(長谷川松治訳)。教養文庫。  
Bestor, Theodore C.  
1989 *Neighborhood Tokyo*. Stanford University Press.  
Douglas, Mary

- 1966 Purity and Danger. Routledge and Kegan Paul.  
Fowler, Edward.  
1996 San'ya Blues. Cornell University Press.  
Freeman, Milton R.他  
1989 『くじらの文化人類学』 海鳴社  
Goldstein-Gidoni, Ofra  
1997 Packaged Japaneseness. Curzon Press.  
Hendry, Joy  
1995 Wrapping Culture. Oxford University Press.  
Kondo, Dorinne K.  
1990 Crafting Selves. University of Chicago Press.  
Leach, Edmund  
1954 Political Systems of Highland Burma. G. Bell and Son Ltd.  
1961 Rethinking Anthropology. Athlone Press.  
1961 Pul Eliya. Cambridge University Press.  
1964 Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse. In Mythology, 1972, P. Maranda ed.  
1976 Culture and Communication. Cambridge University Press.  
Rosenberger, Nancy R., ed.  
1992 Japanese Sense of Self. Cambridge University Press.  
Said, Edward W.  
1978 Orientalism. Routledge & Kegan Paul.

## Japan as seen from social anthropology of the British school

— Leach's 'Animal Categories' as an example —

Tom Gill

This paper is in two sections. In the first section I present data which indicates that Japan is neglected by mainstream anthropology in the English-speaking domain. I suggest that one reason for this may be that in recent years Japan has increasingly been studied not in departments of anthropology or sociology, but in departments of 'Japanese Studies', 'Oriental Studies' or 'Asian Studies'.

This tendency has much to do with financial considerations: the high cost of living in Japan has made it difficult to conduct fieldwork unless it is financed by Japanese money. This money tends to be distributed through departments or programs which grant Japan special status, separate from disciplinary frameworks.

I criticize the area studies approach, arguing that it encourages a persistence, albeit under different labeling, of *Nihonjinron*, the discredited essentialist school of thought which views Japan as 'uniquely unique'.

In the second section I propose a theme-driven, rather than area-based, approach to anthropology in Japan. As an intellectual experiment, I attempt to apply the ideas contained in a famous work of traditional, generalized British social anthropology to the Japanese case.

The work selected is 'Animal Categories and Verbal Abuse' by Sir Edmund Leach. This essay of Leach's deals with prohibitions on the eating of various kinds of animal and on possible connections between those prohibitions and verbal insults which refer to animals. I attempt to show how applying Leach's ideas to the Japanese situation can generate a different kind of anthropology to that which starts from the proposition that the Japanese are unique people who require explanation.